

平成 21 年度 富山県文化審議会

日時 平成 21 年 12 月 25 日（金）10:00～11:45

場所 富山県庁 4 階 大会議室

## 議事

### (1) 21 年度の本県文化関係事業の概要について

<会長> それでは、これより議事に入りたいと思います。本日の進め方につきましては、次第に従いまして、21 年度の本県文化関係事業の概要、ふるさと文学の振興、新世紀とやま文化振興計画の見直しと順次、事務局から説明を受けた後、それぞれのテーマにつきまして委員の皆さまからご意見をいただきたいと考えております。委員の皆さまには、活発なご意見をよろしくお願ひいたします。

それではまず、21 年度の本県文化関係事業につきまして、事務局から説明をお願ひいたします。

#### <事務局説明>

<会長> ただ今、平成 21 年度の事業報告について事務局から説明がありましたけれども、今ほどの県の事業報告につきまして、ご質問やご意見があれば伺いたいと思います。ご意見がある方は挙手をどうぞお願ひいたします。

こうやってお話を聞くと、大変たくさんのごことが、これに限らずまだほかにもあると思うのですが、代表的なものをご説明いただきました。かなりいろいろと大きなことが進んでいるなという印象を持ちましたが、皆さんいかがでございましょうか。ご意見等があれば。よろしいですか、後ほどまたそういう時間をお取りしますので、全体の中でご発言をいただければいいかと思ひます。よろしくお願ひいたします。

### (2) ふるさと文学の振興

<会長> 次の議題に移りたいと思います。資料 12 のふるさと文学の振興につきまして、事務局から説明をお願ひします。

#### <事務局説明>

<会長> それでは、今ほど説明のありましたふるさと文学の振興につきまして、委員の皆さんからご意見を伺いたいと思います。先ほど質問がなかったので少し時間の余裕があり、もしできればこの件で30分ぐらい、ご発言をいただきたいと思います。一人一人全員にご発言していただこうと思いますので、よろしくお願いします。

<〇〇委員> この件につきまして、実は昨日、この辺りを散策しておりました。京都の場合もそうなのですが、市内を散策する散策路と申しますか、そういうものがないかなと探しているところを探しておりましたら、恐らく富山市がやっておられるのですかね、ノーベル街道というのが立派なシンボルとともにございまして、そこから高山に至る街道沿いにノーベル賞受賞者が4人出たということで、大変誇らしくその街道というものを演出しておられました。

文学につきましても、何かそういう点から面への展開というか、一つのネットワーク、それから文学者というのは愛する土地があって、その土地からさまざまなものを得て立派な作品をお作りになっているわけで、それを現在の富山県民があらためて追体験する、それからまた各地からお越しになった方が、その方々の気持ちに触れていただいて自分たちのふるさとを思い起こして自分たちの生き方をあらためて考えていただく。そういう意味から申しますと、やはり会館などを拠点とすることは当然として、それをさらに面へ展開するというか、そういうことがあるとよろしいのではないかと思います。

これは国際的にもそうございまして、まちづくりの一つの特徴として、アメリカあたりにはトレイルというものがございまして、どの町へ行きますとも大体その地域の、例えばハーバードの地域ならハーバード大学ゆかりの街道がございまして、そこを歩きながらハーバードの歴史を思い起こすというようなものがあります。これは国際的にも哲学の道というのはハイデルベルクや京都もそうですけれども、そういう思索しつつ歩く道があるというのは大変質の高い町なのではないか、ある意味で静かなにぎわいがございまして、観光客がわっと押し寄せてというのではなくて、本当に自然にそこで皆さんが楽しみながら、その空間自身も楽しんでいただく、そういう構想を併せて考えていただいてもよろしいのではないかという感じでございます。

<会長> ありがとうございます。中は当然のことながらというお話で、外に広がりを持ったお話をご提言いただきました。大変なご提言だと思いますけれども、よろしくお願いします。

いします。ありがとうございました。

<〇〇委員> 先ほども知事公館の転用の話がありましたが、新しく造るのではなくて既存の施設を転用していくということはこれから先、必要なことだと思います。また、とても環境のいい場所で、何よりではないかと思います。東京の世田谷文学館は文学館の中では来館者が多くてにぎわっております。近くに芦花公園等々があつて文学的な雰囲気があるところなのですが、そういった雰囲気づくりというのは非常に重要だと思います。

それから、私は少し中身の方についてご質問も兼ねて述べたいと思っています。実は、前回の文化審議会でも少しふれたのですが、日本の文化政策の中で文学関係の政策が非常に不足しているのです。全般的に日本は文化政策がまずしい国には違いないのですが、特に文学ということについてはあまり目を向けてこなかった。どうしても文部科学省の中で文化と教育と一体化した中で日本語や言語というような教育の方に力点を置かれてきたことが背景にあるのではないかと思います。海外の方に行きますと、文化芸術の一番中心が文学でして、そういう中でポエム（詩）だとかそのようなものが高い地位を占めております。またそれは、単に印刷されて活字として読むだけではなくて口承、しゃべる方の文学も重要視されておりますので、朗読だとか、朗唱といったことも非常に多く行われております。富山の場合、高岡ですと万葉集の朗唱の会だとかさまざまな場所で声に出して語ろうという文化が残っているところですので、できればこのふるさと文学館というものも図書館等々とは違った、文学の総合的な視点というものを取り入れていく必要があるのではないかと思います。

そういう点でちょっと逆に、建物は非常に素晴らしいのですが、どのような設備を今後この中に造っていくのか。あまり改装して変なものをたくさん造ってしまうのもいかなものかと思うのですが、しかし現在、若い人たち、特に学生たちを見ていると、文学離れが激しくて、ほとんど小説も読んでいない。文学についての知識がないということは嘆かわしいことなのですが、そういう普及活動も含めて、さまざまな事業展開というものを絡めて考えていく必要があると思いますが、それに見合った形で例えばこの場所を使って詩の朗読会、あるいは連句だとか俳句の会とか、さまざまなことをやっていく必要があると思います。こういう取組みをもう少し、今考えていращやること、知事公館の中に拠点としてのどのような設備を作ろうとしているのかをお聞かせ願いたいと思っています。今のご説明だけでは分かりにくいので、お聞かせ願えればと思っています。

<事務局> 委員のご意見につきましては、今、検討を進めています評価・活用委員会の委員からも同様の意見が出ておりまして、来年1月にまとまる基本的な方針の中ではそういった表現の部分をまとめていきたいと思っております。具体の施設の中身についてはこれからまだまだ議論をしていく必要があると思っておりますが、考え方については言われたとおりのご議論で進む方向だと思っております。

<〇〇委員> この文学館のお話が新聞紙上に出ておりましたので、これから素晴らしいものになることをご期待申し上げたいと思っております。

本当に具体的なことしか何も思い付かないのですが、一つ思うのは、老朽化しているということで、新しいものになるときにどのぐらい改修されるか、新しい設備を作るのにどのようなものが要るのかなと思うのですが、一つは私が接している方たちの中には、体に障害がある方がおられます。身体不自由な方の中に文学がお好きな方がたくさんおられ、ご自分で俳句や短歌を詠んだり、エッセイを作ったりしていらっしゃるのです、そういう方たちもぜひこういうところへ、来館してもらえればと思います。車いすに乗って生活していらっしゃる方も多く、高齢の方々にも対応した、スロープや手すりなどのバリアフリーの設備をぜひ作っていただければと思います。

それと、目の不自由な方のための音声や、映像やメディアの設備の中に取り入れていただいたり、先ほどおっしゃったアニメや漫画など、そういうものがあると子どもたちがきっとたくさん訪れてくれるのではないかと思います。

それから、素晴らしいお庭があるので、そういうところにも、小さな子どもやお母さんたちが散策をさせていただいたら嬉しいと思います。その場合も、やはり大事なものを長く残していくために、そういうところでのマナーですとか、文化的価値といったそういうことも教えたり解説したりする、お庭を大切に、設備も大切に使うために、美術館でいう運営ボランティアのような方たち、どのようにこの館が運営されるのか、ボランティアの方がおられるのかということも、またぜひ教えていただければと思います。

<〇〇委員> 文化といっても、私は文学の方は本当に分野違いで、不得意なのですがけれども、先ほどから言われていますように、若い人の文学離れという中で、私たちも身近に感じてそういう施設があると足を運びやすいとか、特に現在の知事公館であれば本当に環

境も良く、一般の方たちは興味を持って行かれるのではないかと思います。そういう中で、やはり私も子どもたちを指導していく面で、いわゆる知識であったり、ものを読んだりして感動するという部分も、年々少しずつ欠けてきているように思うので、ぜひこういう施設を利用して、やはり文学離れを防ぐこと、それから文学から学び取るいろいろな感情とか感想というものを身体で表現して結び付けられることで、これからもっともっと身近に感じていけるのではないかなと思います。

<〇〇委員> 先ほどから伺っていて非常にうらやましく思うのは、富山県というのはこんなに文化を大事にされているのだということです。感心と言ったら言い過ぎなのですが、昨日の午前中にも行ってきたのですけれども、文部科学省の副大臣に日本の芸術文化をもう少し何とか考えてくださいという陳情というよりも文句を言ってきたのです。今はやりの事業仕分けですか、あれはまさに芸術も同じなのです。むしろ芸術などはすぐに必要ないから要らないではないかという意見が非常に強くて、放っておいたら恐らく文化・芸術に関する補助金というものがゼロに近いことになると思うのです。少しは回復しそうで、今日、明日には内閣で最終的な結論が出るという話もあるのですけれども、それに比べて富山県のお話を先ほどから聞いていると、内山邸の改修、利賀村、シモン・ゴールドベルクの室内楽講座、それから先ほどの知事公舎を一般に開放するという、これは素晴らしい考え方だと思います。

ただし、富山県に関係のない友達に「富山に行ったことある？」と聞いたら、行ったことがあるという人は立山、アルペンに行ったことがあるということで、それ以外に富山というイメージが非常に皆さん浮かばないようなのですね。だから、こういう素晴らしい芸術文化に対する計画がある県なのですから、もう少しこういったことを外に向かってPRする必要があるのではないかということ、外にいて感じます。富山県はそういうPRがあまりうまくないのではないかなという感じがいたしますので、正直に申し上げました。

<〇〇委員> 地域文化芸術振興プランというこの辺のことですけれども、文化振興と観光振興、それから文化を生かしたまちづくり・地域づくりの中に一つコンセプトとしてエコミュージアムという発想があると思うのですけれども、富山県の場合は自然と文化が混在しておりまして、やはりこのエコミュージアム、一つのいわゆる美術館などというものではなくてオープンで、例えば砺波の散居村、これなど本当に一つの、ずっと遠

望した場合、素晴らしいこれは文化遺産、住環境遺産だと思いますけれども、エコミュージアムというのを入れることが可能ではないかと思います。特に、私は砺波の方から来ていますけれども、この地域は川筋ということで、小矢部川、あるいは庄川というこの川筋文化というものがもともとあったわけですし、このエコミュージアムと川筋の関係を、エリアでくくると結構面白いものになっていくのではないかと思います。

やはり文化でお金もうけをするというのはおかしいのではないと言われるかもしれませんが、文化振興と観光振興は非常につながりがあると思います。以上です。

<〇〇委員> 若い人の無関心という話を、時間があればしたいと思いますけれども、私は皆さんとバッティングしないようなところで一つ言います。先ほど、「面的な広がり」と言われました。それで、建物とその周辺という観点で言えば、建物の「閉鎖性」というか、閉じる雰囲気やなんとしてでも外してほしいと思います。例えば、芝園小中学校ですが、地域に開かれた学校として、校舎周辺の境界をフェンスなしにして庭などを設けて地域とつながっています。そういう意味で、知事公舎も、セキュリティの問題がありますけれども、これからはどこからでも入れるといったようなことにしてほしいと思います。

それと、少しうがった見方になるかもしれませんがもうひとつ。文学離れも確かにあるのですが、多くの県民にとっては、文学というものがあそこにいけばあるのだという、いってみれば心の中までの連携がバリアレスで生まれるはずですので、連携の活用が必ずどこかで、子どもの世界でも花開くと思います。ですから、広がりを持ちバリアを設けないという意味で、全体をバリアフリーにしてほしいと思います。

<〇〇委員> 私は知事公館をよく利用させていただきました。行きますと朝から夕方までいるのですが、春雨の中、朝にはまだほころびていない桜が昼過ぎには咲きだすのが見えるという美しい庭園のある環境です。ここが文学館になるというのは本当に嬉しいことです。

文学は文化の底力をなすものです。県内の文学の資料を蔵し、それを基盤として研究がなされていくのでしょから、是非、研究を推進してゆく人がそこから育っていくようにと望みます。

昨年10月、射水市に歌人である高松光代さんの歌碑が立ちました。例えば、この一人の歌人をめぐっても、昭和史、女性史として興味深いものがあると思います。学ぶこ

とへ導く人、文学を愛好する人の拠点として文学館は大切です。ボランティアとして学びのグループが出席するのもいいでしょうし。

また、詩歌文学の創作の場として、文学賞を設けるのはいかがでしょう。芸術文化協会が出している「とやま文学賞」を支援することも考えられます。以上です。

<〇〇委員> 「ほしのふるまち」は氷見が舞台です。確かに全国から漫画のファンで、「ほしのふるまち」のロケーションを見に写真を撮りに来られる方とか、また氷見は藤子不二雄<sup>④</sup>さんの出身地なものですから、それを求めて全国から来られる方もたくさんおられます。ですので、このふるさと文学ということで振興していくのであれば、まさにわがふるさとの文学であるという作品の背景も込みで広く紹介をしていくというのが、県民にとってはすごく有効なことなのかなと感じております。

また、活字離れが著しいといわれていますけれども、本による活字からは離れているかもしれないのですが、インターネットの小説や携帯の小説からヒット作品も生まれているということを考えましたら、ふるさと文学の紹介の仕方というのも、いろいろなメディアを駆使したような見せ方をしていくことによって、より広く見ていってもらえるのかなというような感じもしております。

それともう一点、最後なのですが、見せるということ、振興ということからいきますと、なるべく多く、広くの方に知っていただかないことには、周知していただかないことには、振興ということにならないと思いますので、この平成 22 年に開設される富山バーチャル文学館ですとか、知事公館を使った本当の文学館というものは、内容も大変大切なことは間違いないのですが、これが開かれるよ、あるよ、何ができるよというようなお知らせ、PR を十分にぜひしていただかないと、多分、文学に通常かかわっていない県民の皆さんにとっては、そんなことがあったのということで終わってしまわないかなというので、ぜひ PR、発信をしていただければと思います。

<〇〇委員> 2 点お話ししたいと思います。先ほどの平成 21 年度事業概要をお聞かせいただいて、知事が非常に力を入れようとしているふるさと教育の推進にも本事業が役立てられると思います。ふるさと教育の推進に関しては、別の委員会で、その内容や推進方針が議論されていますが、まさしく伝統文化から舞台芸術、自然環境も含めた幅広い内容になっています。あとはこれら多様な内容を、どのように関連付けて県民運動としてのふ

るさと教育を展開していくかです。そういう意味では、本県文化関係事業がその中心的役割を担えるものと思います。

今ほど話にあったバーチャル文学館やその後の散策ツアーは非常に興味あるものです。ただ、この手のバーチャル文学館は、作っておしまいになりがちです。作った後に、それを活用する県民運動をどのように展開していくかということが非常に大事になります。そこには、やはりその役割を担う人が不可欠です。これだけ多くの分野が絡んでいますので、興味ある人だけが訪れるというのではなく、例えば学校教育とつなぐ、例えば社会教育とつなぐ、異世代間交流も含めた地域コミュニティの活性化事業につなぐなど、幅広い視点からコーディネートする人材です。バーチャル文学館を核に、県民の幅広い文化啓発事業への展開を考えることが今後のポイントかと思います。

もう一点、散策ツアーの計画について、素晴らしい取組みだと思うのですが、散策して楽しかった、感動したで終わってしまっただけではもったいないと思います。散策しての気づきや感動を県民が広く共有し、その話題で盛り上がるような、情報発信と情報共有、そこでの相互コミュニケーション等を可能とする場づくりが必要です。散策ツアーをやりますから集まってくださいとあって、参加した人はそこで感動を得るかもしれませんが、その感動を他の人たちに、もっとつなげていくような仕掛けづくりが県民運動としての広がりには必要なのではと感じました。

最終的には文化振興に係る幅広い取組みを通して、地域のつながり力が出てくる。そうすれば、地域にあって、若い人からお年寄りまで、それぞれ文化活動を通したふるさとの良さ発見や地域コミュニティの活性化につながるのかなと感じました。以上です。

<〇〇委員> 若い世代の文学離れ、文字離れとたびたび出てくるので、大変責任を感じております。ただ、高等学校文化連盟の中にも、文芸専門部という専門部がありまして、高校生の中でも文字や言葉を使って自己表現をしようという子どもたちはたくさんおります。今年の9月にも、北信越5県が集まって文芸道場というのをやっております。これは石川県でした。そこで石川近代文学館も見学し、私も行きましたが、大変うらやましく感じました。それで今お話を聞いて、非常に期待をしております。

この北信越の文芸道場は、実は平成23年に富山県が担当してやることになっておりまして、そこに間に合うかどうかなのか。今から建物ということ自体、間に合わないのかなと思



いますが、その翌年の平成 24 年には全国大会、全国から高校生が集まってやる大会を予定しております。そういう中で、文学散歩というような活動もあるので、ここらあたりはどのようなかなと思っております。ふるさと文学の道も素晴らしいと思いますし、2 番目の楽しみながら学べる場としてということも非常に賛成でございます。平成 24 年ですので、本当に時間的にどうなるかなと思いますけれども、平成 22 年のバーチャルにも期待をしますし、今、資料を分析しておられるということなので、ぜひ高文連の文芸専門部にはその途中経過でもよろしいですので、そういう分析がどこまで進んで、富山にはどういうものがあるかというのを少しお知らせいただけたら、あるいは公開していただけたらと思います。以上です。

<〇〇委員> まず感想なのですが、本当にこの富山県で文化に関する事業をこんなにかくさんしているのか、耳にしたことのある事業も、ああ、これもこういうつながりがあるのだということであらためて知りまして、本当にいかに自分も知らないことが多いかということを知りました。つまりほかにも知らない方がたくさんいるということであり、やはり他県への PR という話もありましたが、やはりまず地元というか県民の方にも何とかたくさん知らせていろいろなことにかかわっていただければもっともっと広がるのではないかなと思いました。まず、最初に何かで取りかかれば、次はまた行こうかな、参加しようかなとなるので、その取りかかりを何とか作ってあげなくてはいけないかなと思いました。

あと、ふるさと文学の振興についての件ですが、やはりここでしかないものというのがあると、とてもいいのだろうなと思いました。例えばここへ行けばドラえものすべてが分かるとか、そのようにすると子どもにも大変人気があって、全国からでも人が来るのではないかなと思いました。そのほかに、子どもたちはよく学校で俳句をたくさん作っていて、それを飲料メーカーなどに投稿していることが結構多いです。そういうのを例えばこのふるさと文学館で募集をして、子どもたちにたくさん参加してもらおうというような形で、若者、子どもたちがいろいろ活動できるような場があればいいなと思いました。

<〇〇委員> 富山県は非常にコンパクトな県なので、面という意味では非常にやりやすい県ではないかなと感じます。そのつながり、見せ方ということで、魚津にあった洗足学園はなくなりましたが、池田彌三郎先生がしばらくおいでになりました。そのとき、

池田文庫というものを作ってあったのですけれども、大学がなくなったものですから魚津市ではどうしようもできなくなって今、県立図書館に預かっていただいています。けれども、これもつながり、見せるという意味で、その中に一つ加えてほしいなと思います。それと、調べていかなければいけないということであれば、彌三郎さんの直の教え子さんがまだ富山に何人かおいでになられるので、その人たちが働ける間に、ぜひそういうことを進めていただきたいなと思います。

それで、その学校の話ですけれども、音楽大学だったので、音楽のかんりの資料が図書館に残ったままになって扉が閉まったままになっているのです。その管理もできないし、どこかに集めてこういうものを大いに利用するという方法をぜひ考えていただければなと思います。以上です。

<会長> ありがとうございます。皆さんから大変積極的なご発言がありまして、大変多岐にわたるご提言もありました。どれ一つとしてネガティブな話はなくて、この知事公館を使うことの良さも含めて、ただそこからスタートするときに、これだけのご意見が出るということは大変関心が高いので、やはり既存の建物であっても、どう設計するか、それから点から面の話ではないですけれども、どうその拠点をさらに充実していくかというのは、全部を完璧に尽くして説明するわけにはいかないかもしれませんが、かなり考えてスタートしていただくのが大事だろうかと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。ありがとうございました。

### (3) 新世紀とやま文化振興計画の見直し

<会長> それでは時間の都合もありますので、次に進ませていただきたいと思います。資料13の新世紀とやま文化振興計画の見直しについて、事務局からお願いします。

#### <事務局説明>

<会長> ありがとうございます。今ほど説明がありました見直しにつきまして、ご意見があれば伺いたいと思いますが、いかがでございましょうか。何かございませうしょう

か。

<〇〇委員> 全体にかかわるのですけれども、よろしいでしょうか。最初のお話もありましたように、「無関心」ということが取りざたされておりますけれども、解決策は「文化財というものはいったい何のために残すのか」ということをもっと考えることにあると思います。もちろん、この場において歴史的価値、学術的価値、地域的価値、生活的価値、芸術的価値の観点から議論はなされたことであろうけれども、そうした価値が市民にとってどうかかわりをしているかということになると、取組みがやはり弱いように思うのです。

それで、先ほど言われましたように、市民がいろいろな文化財とめぐり合うチャンスを増やすということはもちろん大事だと思います。ですけれども、寺院等の建造物も含めて文化財そのものもが加齢し、いずれは朽ちていくといったことをもっと根源的に考えることも必要です。となると直ぐに「修理修復を万全に」となりがちですが、そうではなく「なぜ生き長らえさせるのか」ということです。これはやはり命の問題といえるでしょう。文化財はまさに生きているのです。我らの生活しているところに、文化財は長く命をつないで我らと接しているのです。そこには、若い生命も老いた生命もコミュニケーションし寄り合いながら、生命同士がこなれていくことになり、生命が力強く育まれていきます。これが「残すこと」の最大の理由であり、また我らが大事にしたい視点であると思います。そうした観点がないと、「文化の継承と創生」といったときの創生も、実に軟弱なものになるのではないかと思います。紅葉を例にとれば、色鮮やかに紅葉するには、夏にしっかりと養分を蓄えておかねばなりません。文化の継承というのはまさにそういうことだと思うのです。そして、それが次の新しい生命を生むということです。

そうすると、若い人はどんなふうに養分をとっていけばいいのでしょうか。養分イコール感性と考えますと、感性を磨くチャンスと場が少なくなっていることが気がかりです。聞くところによりますと、中学の美術や音楽などの授業時間数が私どもの頃に比べれば相当減っています。中教審ではそういう科目を選択科目にしようとしているとも聞いています。確かに情報社会ですから、いろいろなものを学んでいかななくてはいけないというのも事実ですけれども、感性というものをどうやって育むかを、もっと考えていきたいです。それには、世の中、発信、発信とっていますが、受信する側、つまり個人の問題、人の問題、心の問題として、感受性に磨きをかけることが必要だと思います。そしてまた、家庭

の次元からの人間性醸成といったことも必要でしょう。

ある中小企業団体の懇親会に呼ばれたとき、中小企業団体では社会貢献としてこんなことをしています、あんなことをしていますとっておられました。そんなことよりもお父さんたちは早く家に帰って、家庭でご飯でも一緒に食べればいいのではないのでしょうか。そういう視点が根底にあるということを、文化問題においても何かにおわせる方策があるかと思えます。ちょっと長くなりました。

**<会長>** 昔、建築の寿命というか、いつまで寿命なのか、臨終はいつかという議論があったのですけれども、日本人で臨終の話をしていきますと、アメリカ人から臨終を考えること自体がまず間違いだというように提言があって、なぜ再生しないのだ、そのまま使わないのだという話があって、みんな愕然としたという一幕がありました。

いろいろな考え方があって、何が大事なのか、何を残さなければいけないのか、何を残していいのかというような、本質的な話なのだろうと思えます。であるがために、なかなか難しい話だと思えますけれども、また考え方の一つとして、よろしくご検討をお願いします。

ほかにご意見ございますか。どうぞ。

**<〇〇委員>** 一つだけ、先ほど来、ふるさと文学館の話でも人材の話が出ております。やはり文化を支えていくのは人間であり、またその人間を支えていく、活かしていくための仕組みではないかと思っています。

文化というのは一つの大きなストックであって、そこからさまざまな要素を引き出していくということが、非常に重要ではないかと思っています。それを引き出していくためには、それについて幾つかの人材が必要になってきます。その人材がきちんと活躍できるような状況を作っていくということが、文化行政の大きな役割ではないかと思っています。

特に、先ほど来出ています事業仕分け等々ですが、その評価は別としまして、明らかにこれから先は地方主権といいますか、分権といいますか、特に文化の仕事というのは昔から地域が主体になってやってきた仕事ですので、こういった部分で地域の文化からさまざまな要素を引き出していく、それは観光になったり、産業になったり、あるいは人々の精神の豊かさになったり、さまざまな要素があると思えますけれども、そういう人材の育成を、特に今回の見直しの中で新しい柱として確立していただきたいと思っている次第です。

#### (4) その他

＜会長＞ いろいろな意見が出ているのですが、今日は三つのことに焦点を合わせて議事を進めてまいりましたけれども、最後に、これまでの議事を踏まえて、文化振興全般にかかわることでも結構でございますから、日ごろの活動からお気づきの点であるとか、あるいは今ほど説明がありました平成 22 年度予算に向けた要望であるとか、あるいは中長期に取り組むと良いと思われる事業の新しい提案であるとか、どのような視点でも結構でございますので、またしばらく時間を設けますので、ご発言があればよろしくお願いいたします。いかがでございましょうか。どうぞ。

＜〇〇委員＞ 他分野との連携とあるのですけれども、他分野となりますと、美術・工芸関係、文学関係、音楽関係などという話になるのは当然であり、そのとおриと思うのですが、実はもっと大事なのはエンジニアの分野について何か巻き込んでいけないかということです。手前味噌ですが建築文化がどうあるべきか、社会はどうあるべきかということもいつも考えています。一方、エンジニアの方、例えばロボット技術者は社会参画としてこんなのがいい、IT 技術者があんなことをしたらいいというように、彼らは独自にいろんなことを考えて世に製品を送り出していますが、残念なことに文化といったような次元での整合性があまり取れていないように思います。

私は、子ども関係の学会の集まり展示会があったときにロボット技術者と以下のようなやり取りをしました。彼は、その場に「友達のいない一人ぼっちな君へ。AIBO 君と遊ぼう」というようなパンフレットをもって AIBO 君のようなロボットを出品しておりました。当然のことながら、子どもたちは誰も見向きもしませんでした。ですけれども、私が「それではダメ、なぜかをもっと考えたら」と言ったら、彼はちょっと考えて細長い風船を aibo 君の首に巻きつけみたくところ、急に子どもたちがよってきて、場が盛り上がりました。エンジニアの視点が狭いという訳ではないのですけれども、彼らに文化性や人間性をもっと考えていただかないと、と思うしだいです。文化関係の方が「文化はかくあるべし、世の中はこうだ」といくら言っても両者がぜんぜん噛み合わず、そのうち便利さと効率優先の技術がわっと押し寄せてくることにもなりかねません。それはそれで経済活動の活発化としてはいいのでしょうけれども、皆さんで文化をつくるということになれば、彼らにも文化論議の視点を持っていただきたいものです。

<〇〇委員> 文化と一言で言いますが、例えばネクタイを選ぶのも文化、飯を食うのも文化で、文化は本当に限りない。それぞれみんな自分の守備範囲があって、その中でもいろいろ悩んでやってきているのだと思うのですけれども、今おっしゃられたのでいくと、限りないものにはやはり手を付けない方がいいのではないかと思うのです。本当に切りがないし、私は音楽における音楽を通した芸術文化というものを追求していきたいですし、それぞれのいろいろな考え方があっていいと思うので、少なくともこの委員会では自分の守備範囲の中での文化討論をするというのに、取りあえずはやはり徹した方がいいと思います。

<会長> ありがとうございました。ほかにございますか。もしなければ、予定の時間が迫ってまいりましたので、本日の議事はこれで終了したいと思います。委員の皆さまには、大変活発に貴重なご意見を発言していただきまして、ありがとうございました。